

【Meeting Room 7】 パネル3

フィリピン・ベトナムにルーツを持つ子どもたちの母語・継承語学習をめぐる状況

代表: 近藤 美佳
(大阪大学)

2020 年末現在において、約 288 万 7 千人の外国人が日本に在留している。国籍・地域別に見てみると中国が最多で 27.0%を占め、以下、ベトナム、韓国、フィリピン、ブラジルと続く。年齢別に見てみると最も多いのは 20～40 代であるが、0～18 歳も約 30 万人を数え、少なくない数の「外国籍の子ども」が日本で暮らしていることがわかる（法務省「在留外国人統計」）。また、2018 年時点で日本の公立学校に在籍している外国人児童生徒数は約 9 万人、うち 4 万人が日本語指導を必要としているというデータもある（文部科学省「学校基本調査」、「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」）。これらのデータからその一端を知れる通り、現在、日本には多くの言語的・文化的に多様な子どもが暮らしている。このような子どもたちを、本パネルでは包括的に「外国にルーツを持つ子ども」と呼ぶことにする。

日本で学び育つ外国にルーツを持つ子どもたちは、日本語や日本文化、教科学習、進路等に関する諸問題に直面するほか、自身がルーツを持つ国の言語や文化とどのように向き合うかという課題も抱えることとなる。2014 年には、児童生徒が学校生活を送るため、授業を理解するために必要な日本語指導を「特別の教育課程」として実施できる制度が導入され、日本語指導については整備が進みつつあるが、子どもたちの母語・継承語指導に関しては、関連文書の中でその重要性が指摘されたり、母語・母文化に触れさせる機会を持つことが望ましい等という文言が記載されたりするに留まり、具体的な制度はまだない。そのため、ごく一部の自治体や学校、外国人集住地域の取り組みとして実施されているほかは、家庭に「丸投げ」になっているのが現状である。

本パネルでは、このような外国にルーツを持つ子どもたちへの母語・継承語指導について考えるべく、初等教育段階におけるベトナムにルーツを持つ子どもたちの母語・継承語学習支援事例（第 1 報告）、中等教育段階におけるフィリピンにルーツを持つ子どもたちの母語・継承語学習支援事例（第 2 報告）及び在日ベトナム人家庭における母語継承の実態（第 3 報告）について報告を行う。報告を踏まえ、ホスト国である日本社会における東南アジア研究者として、このような子どもたちが日本でよりよく生きていくために、どのような働きかけが可能かを議論したい。

【Meeting Room 7】 パネル3

公立小学校における母語教室を目指すこと

ベトナムにルーツを持つ子どもたちへの学習支援活動を通して

近藤 美佳

(大阪大学)

神戸市立 S 小学校は外国人集住地区に位置し、外国にルーツを持つ児童が多数在籍する学校である。S 小学校にはベトナムにルーツを持つ子どもを対象とする母語教室（以下、H 教室）が設置されており、子どもたちは週 1 回放課後に低学年クラス（1～2 年生）と中高学年クラス（3～6 年生）に分かれて、それぞれ 45 分間の学習を行う。報告者は 2016 年度より H 教室で講師を務めている。本報告は、H 教室において実施した「コース別学習」の実践について、授業計画・記録とフィールドノートに基づいて報告しつつ、公立小学校における母語学習活動の意義と課題を再検討するものである。

「コース別学習」と呼ぶ学習は、3～6 年生クラスで実施される学習内容のひとつである。2 時限を 1 ユニットとして行い、1 時限目はベトナム語の物語（250 語程度）の聴解を行う。ベトナム語で物語を聴き、各々が聴きとれた内容をつなぎ合わせて、クラス全体で日本語による口頭での物語の再話を完成させる。2 時限目は、それぞれの子どもの実情に合わせたコースに分かれてプリント学習を行う。プリントの内容はすべて先の時間に読んだ物語に基づくものであるが、課される課題はそれぞれ異なる。各コースの対象と内容を以下の表に示す。

コース名	対象	内容
A コース	来日間もない子ども	日本語で物語を音読し、日本語の文法や表現を学ぶ
B コース	1. 学習言語としての日本語が弱い子ども 2. ベトナム語を知らない子ども	日本語で物語を音読し、それを口頭及び筆記で再話する
C コース	日本語での学習に大きな支障がなく、ベトナム語の読み書きは未習の子ども	物語に出てきたことばを用いて、ベトナム語の単語・短文を書く練習をする
D コース	日本語での学習に支障がなく、ベトナム語の読み書きがある程度できる子ども	物語に出てきたことばを用いて、ベトナム語の文を書く練習をする
E コース	1. ベトナム語で読み書きができる子ども 2. 来日間もない子ども	物語の内容に関するベトナム語の質問に、ベトナム語で回答したうえで、筆記で再話する。

「コース別学習」では、子どもたちがそれぞれ自分の「得意」なことを活かして活動に参加する姿や、学年やコースを超えた助け合い・学び合いが自発的に生じる過程が観察された。

同じ学校に通うベトナムルーツの子どもたちであっても、家庭環境等によりベトナム文化やベトナム語に触れる程度は大きく異なり、それは子どもたちのことばの力や学習に向かう姿勢の差となって表出する。「コース別学習」はその差を活かす授業実践の一例である。このような「ちがいを認め、尊重し合い、助け合う姿勢を身につけることを、母語教室が目指すことのひとつとして掲げたい。

【Meeting Room 7】 パネル3

フィリピンにルーツを持つ子どもに対する母語・継承語学習支援の意義と課題

矢元 貴美
(大阪大学)

本報告では、公立高校で実施されている、フィリピンにルーツを持つ生徒を対象としたフィリピン語の母語・継承語教育の事例を紹介し、生徒たちの授業に対する意見や感想を取り上げつつ、その意義と課題を検討する。

2018 年度には、日本語指導が必要な児童生徒のうち、フィリピンにルーツを持つ児童生徒は外国籍の児童生徒の約 19.5%を占め、1997 年度の約 13 倍となり、母語別では第 3 位、日本国籍の児童生徒でフィリピン語を使用する者は約 32.8%を占め、言語別では第 1 位であった。2001 年から 2020 年の 20 年間に日本国内では、日本国籍の親とフィリピン国籍の親を持つ子どもは約 6 万 7 千人、外国籍の両親の両方か一方の親がフィリピン国籍である子どもは約 1 万 4 千人生まれている。

中国や韓国・朝鮮、ブラジルにルーツを持つ子どもが多い地域では、地域レベルで母語・継承語教育の実践が蓄積されてきた。一方、統計で上位を占めるフィリピンにルーツを持つ子どもを対象としたものは、地域においても公教育においても、ごく一部で実施されているに留まる。それらの教育は、子どもやその保護者からの要望によって行われるものよりも、子どもたちが通う学校や地域の団体が主導して行うことが多い。

本報告における調査対象は、近畿地方の公立高校で実施されているフィリピン語の授業であり、主に授業における参与観察から得られたデータを基に考察する。当該高校では母語や母文化の保持を目的とした言語の授業が単位認定される授業として設定されており、学齢期に来日した生徒の他、日本生まれ日本育ちの生徒や、幼少期に来日した生徒も受講している。報告者は 2009 年度から 2020 年度まで週 1 回程度、フィリピン人教員とともに、フィリピン語の授業の運営と生徒たちのサポートに当たった。

明らかになった意義としては、仲間同士で経験や気持ちを共有できること、家族や親戚との繋がりを再確認できること、ルーツに誇りを持てることがある。これらの意義は、学齢期に来日した生徒であるか、日本育ちの生徒であるかにかかわらず、共通していると考えられる。課題としては、先行研究で明らかにされている、レベルの多様化への対応、人材や教材の確保、動機づけの難しさもある。本研究においてはその他、目的・方針が確立されておらず授業提供者と生徒たちとの間で授業に対する認識にズレが生じていること、フィリピン語以外のフィリピン諸語を学習する機会を提供できていないことに課題があることも明らかになった。

[Meeting Room 7] パネル3

在日ベトナム人家庭における母語・継承語について

PHAM PHI HAI YEN
(大阪大学・博士後期課程)

報告者は、日本で子育てをしているベトナム人であり、子どもをバイリンガルに育てることを希望する当事者である。家庭における母語継承を実現するために絵本の読み聞かせが有効であること、また、子どもが言語を獲得する際にオノマトペが重要な役割を果たすことから、報告者の娘である M を対象に、オノマトペ・畳語・繰り返し文（以下、これらをまとめて「リズムを持つ言葉」と呼ぶ）を多く含むベトナム語の絵本を読み聞かせ、それに対してどのような反応があるかを観察した。観察期間は 2019 年 2 月 1 日から 8 月 31 日、観察開始時点で M は 2 歳 2 か月であった。

結果、M は「リズムを持つ言葉」をより多く含む絵本に興味を持つことがわかった。読み聞かせはそれぞれの絵本につき複数回ずつ行ったが、初めの 1, 2 回は「楽しそうに本の読み聞かせを聞く」と「もう一度読んで頼む」という反応が見られるのみだったが、3, 4 回目以降になると次第にほかの反応も見られるようになった。例えば、絵本に出てきた「リズムを持つ言葉」を真似して、その言葉に関連する事物を表現するようになった。また、絵本の内容を記憶して再生することもあった。母親が読み聞かせをするのを真似て、絵本を指差しながら話をし、登場人物やこれから起きる出来事についてクイズを出してきた。それに答えると、回答を褒めたり、「違う」と言って正しい答えを教えるというやり取りが生まれた。さらに、ある言葉を聞いたとき、その言葉を日本語からベトナム語に、またその逆方向に訳出する習慣がついた。加えて、絵本で覚えた表現が別の絵本で出現したときに、M が自分からその表現について言及したり、日常生活で自発的に絵本の言葉を使ったり、親の質問に対して絵本に出てきた表現を使って答えたりするようになった。そして、読み聞かせをきっかけとした M のベトナム語の発話の質も単語、単文、連文・複文へと変化していった。

現在、M は 5 歳になり、身体の成長と共に言語能力やコミュニケーション能力、理解力や思考力も発達している。しかし、毎日、日本の保育園に通っていることによって、現地語である日本語の力が伸びている反面、家庭内におけるベトナム語での親とのコミュニケーションの量は減ってきている。親がベトナム語で話しかけても、日本語で返答することが増えてきているのだ。親の日本語能力が高いこと、ベトナム語の絵本が少ないことなども、ベトナム語使用を妨げる要因であると考えられる。今後、子どもが就学したら、どのようにベトナム語の力を支えていけばよいのだろうか。子どもを持つ在日ベトナム人の多くが抱える共通の課題である。